

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

源氏物語作中人物事典

西沢正史編 源氏物語のあらすじと登場する主要人物・脇役六十人について作品中の役割りや描かれ方などを詳細に解説しその全体像がわかる定価四五二五円

源氏物語を知る事典

西沢正史編 物語全体の捉え方・女性たちの物語 巻々のあらすじ・紫式部の人生と作品・源氏物語の歴史的背景など八章に分け平易に解説した。定価二六二五円

日本語の文体・レトリック辞典

中村 明著 長年、日本語の文体論・表現論を研究してきた著者による本格的な日本語のレトリック・文体論辞典。約一〇五〇項目を収録し解説定価三三六〇円

中世のことば辞典

「鎌倉遺文」にみる ことばの中世史研究会編 古文書の中に出てくる言葉約一五〇語選り中世での意味・用例の初出・その変化などを解説したはじめての国語辞典。定価五二五〇円

CD-ROM版 くずし字解読用例辞典

山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆定価二九四〇〇円

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

(価格は税込)

幽斎源氏物語聞書

野口元大・徳岡涼編 A5判 692頁・定価一五、七五〇円

伝授された源氏の奥義と古注釈の享受過程を伝える
絶賛発売中 幽斎の著作のうち「源氏物語」に書き入れられた注釈部分を翻刻し公刊。中院通勝が室町末期にまとめた源氏物語最大の注釈書『眠江入楚』の礎を築いた、幽斎の源氏物語研究の変遷を今に伝える。古注釈からの引用の他、幽斎独自の注、三条西実隆・宗祇・紹巴・兼載・兼如らの説も見られる。

古筆と源氏物語 第3巻

古筆学研究所編 A5判 330頁・定価六、六二七円

源氏物語継承の実態を古筆学の立場から明らかにする
【目次】源氏物語初期古注釈の問題 稲賀敬二／「源氏物語」三条西家本を論じて別本に及ぶ 片桐洋一／源氏物語受容の二様相 寺本直彦／源氏物語の求婚の贈答歌 小町谷照彦／物語の長編性 鈴木日出男／紫式部日記の古筆切と写本 萩谷朴／源氏絵二趣 松原茂／参考図版（五島美術館蔵国宝源氏物語絵巻）一伝頭附筆 建仁寺切本源氏釈 等56点
【シリーズ既刊】①は品切
②古筆と写経 定価六、九三二円／④古筆と絵巻 定価六、九三二円／⑤古筆のあゆみ 定価七、三五〇円

藤原定家の日記「明月記」読解の必備図書
明月記研究提要 絶賛発売中
明月記研究会編 B5判 266頁・定価六、三〇〇円

八木書店 出版部

【呈詳細内容見本】 * 定価は本体+税5%の総額表示です。
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 K探送
03-3291-2961 [FAX-6300] http://www.books-yagi.co.jp

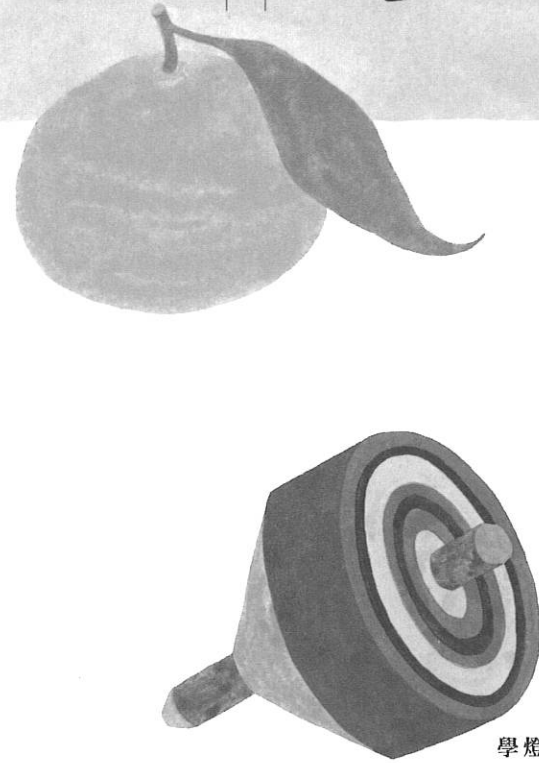
国文学

日本語・日本文学・日本文化 二〇〇八年 第五三巻一号 解釈と教材の研究

特集 絵で読む源氏物語

◆新春対談「源氏の魅力を探る」伊井春樹 加賀美幸子
◆木谷眞理子／横井孝／池田忍／内藤正人／片桐弥生ほか

新連載スタート
上田篤 西郷隆盛——「明治維新」に異議をとねえたラストサムライ



学燈社

国文学 解釈と教材の研究

平成二十年一月十日発行 毎月一回十日発行 第五十三巻第一号 二月
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可 (通巻七六号)

定価一六〇〇円 本体一五二四円

ISSN 0452-3016
雑誌 03787-1



4910037870186
01524

Printed in Japan

心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず
本莊雅一

第四回 心意伝承とは何か④ トランスフォーメーションという原風景——上原輝男の生命燃焼

稚児・童子・若

心意伝承研究は、教育学の基層を成すものだ。教育基層学として、定位しなければならぬ。

上原輝男は、そう考えた。

広島高等師範卒業後、郡司正勝、折口信夫、西角井正慶、守随憲治に師事し、教育学、国文学、美学、民俗学



上原輝男博士

を修めた上原は、これら諸学に、心意伝承論という、一本の骨髄が通るのを見た。折口信夫は、「人間の社会生活を題目として研究する人は、いつぱい民俗の採集、つまり生きていく人間の精神現象を採集してることが必要だ」（『民俗学への導き』一九三七年『折口信夫全集』ノ1ト編七）九四頁）と主張したが、その折口最晩年に入門した上原は、折口の学渾身の一滴を、そのまま自身の学的生涯の血脈としたのである。

「子どもを守り育てるための教育が、今日の社会機構の軋みの下敷きに、子どもを追いやってしまった」「近代に入って、（中略）個人の生命を単位とすることを常識化する教育は徹底を極めた。（中略）あれほど大切にされた『家』は消滅していた。神仏も美術品でしかなかった。」「日本人は生命の拠り所を

失ったのではないか。生命は消耗品でしかないのか。」「教育学はなんのために存在するのか。人間生命の基層を対象とせぬ教育学に人々の関心が向けられようがない。」「親から子へ、子から親への、個人を超える継承的生命を思わない限り、日本人の生命観は衰耗し破綻する。」「ただひたすらに、いのちの在りようを求め続けることが、教育の尊厳性をつなぎ止める残された道であろうと信じるばかりである。」「（上原輝男編著『いのちの教育を再び』基層教育学試験論集）一九九三年 明治図書 三〜四頁）

教育基層学とは、しかつめらしく啓蒙的な思想や倫理的教訓を並べることではない。人間を調教訓練するための理論武装でもない。何かの役に立つかどうか以前に、人間生命の生成発展の原態を知るべきだということである。泥臭く、虚飾のない、最も素直な感情の摂理に従うところから、道徳が発生し、小さな生命がゆたかに伸びてゆく軌道も現れる。われわれはどのように生きるべきか、人生とはなんなのか、と、観念的思弁的に議論するのはやめる。少なくとも、優先しない。我々はどう生きてしまうのか、人生に何を求めてしまうのか、を、具体的な像で捉えようとするのが心意伝承論である。たとえ

ばウルトラマンにしばれてしまうのも、生き方の一つには違いないのだ。

古人の生活・感情と、我々の生活・感情とに、まるで遺伝のような相が見つかるとして、心意伝承と呼んできた。人々の生活の歴史に焦点を当てて、さまざまな民俗・民間伝承を知ること、素朴で偽りのない実態に触れられる。ただそうした事例で、科学的に心のメカニズムを解析することは出来ないが、我々がどのような心性を発揮する可能性があるかを、具体的に自覚することは、出来るはずである。しかし、それと教育とはどう結びつくのだろうか。

「心意伝承の研究の究極のテーマは稚児であろうと私は思い定めているのである。」（『曾我の雨・牛若の衣裳—心意伝承の残像—』二〇〇六年 暮しの手帖社編集 一〇頁）と上原は言う。これは、子どもの可愛らしさの研究ということではない。「親から子へ、子から孫へ、いのちの回帰する最も信頼すべき憑依存在」（『曾我の雨—一〇頁）としての稚児である。もう少しくだいてみよう。これは単に、五歳前後の幼児という意味ではないのである。たとえば「京都の祇園祭のあの山鉦巡幸も、五位の資格を持つ稚児が標めを切ることによって動き出す。鹿島神社の祭頭祭も、昨年の春季祭に卜定された

左方右両字の大総督が、家族役員に護られて昇殿して執行され、唯しの先頭に立って采配を振る（『曾我の雨』二四三頁）といったように、神事の中で最も高い資格というか、霊格を持つと信仰される存在に注目する。それがたまたま五歳前後の幼児であるに過ぎない。過ぎないが、「稚児」即ち「稚い児」と表記されるように、若々しさを強く感じさせる存在でなければならぬ心意が、反映されてもいるのである。

上原は、「若」は日本人にとって、根底的な生命存在観だと言わねばならない。また具体的な教育の根本問題でもある（『感情教育論 子どもの言語生態研究』一九八三年 学陽書房 一頁）と確信していた。しかも、「若」は人間の年齢区分でもなければ、また一定年齢者の形容詞でもなかったのである（同）と指摘するのは見逃せない。たとえば箱根神社にある曾我兄弟の木像を見ると、烏帽子をつけた正装の兄十郎像の横で、五郎像は烏帽子をつけず、少し割れているガリポンのように髪を結い上げ、綿入れのような厚手の着物をまとっている。これはあくまでも「五郎時致」の像であり、幼童「箱王丸」として伝わっているものではない。つまり年齢に関係なく、五郎を稚児存在と見る心意伝承の具体像なのである。同様の例はまだまだある。「酒吞童子」「茨木童



曾我五郎時致木像



曾我十郎祐成木像

「箱根神社パンフレット」より



「平治物語絵巻」[信西の巻]
第一段より。年輩の牛飼童
(静嘉堂文庫美術館蔵)

子」などは大力巨軀の鬼神としてイメージされ、崩御した天皇の棺を担ぐ「八瀬の童子」には、六〇歳前後の老人もいる。「牛飼童」と呼ばれる人々にも、白髪の人物は少なくない。童髪という髪型で、そうした身分を表している。これを差別制度と見る人もいる。だが、なぜその様にして「差別」するのだろうか。

郡司正勝は、歌舞伎「菅原伝授手習鑑」の「松王・梅王・桜丸の三つ子の兄弟の牛曳きの小舎人たちが、ひとしく童子格子の衣装をつけるのは、『童子』としての身分を表現した」（『童子考』一九八四年 白水社 三三

頁）と指摘した。この三つ子が、菅丞相親子に特別な役割をもって奉仕する存在と描かれているように、童子の身分とは、特殊な資格・霊格を持ったものとして、「差別」されているとは言える。並の人間ではないと見られる点で、信仰対象に近い存在ともなっているのである。本誌連載中の綱澤満昭氏「鬼の思想 第3回童子と鬼その1」（二〇〇七年十二月号）にも詳しい。是非参照されたい。問題なのは、若さを表す身分と、被差別性と、神聖とが、どのような構造をもちながら、日本人の心意に伝承されているのか、ということである。

たとえば上原は、源義経の幼名が牛若丸というのも、歴史的事実というより、心意伝承の結果として定着した話だと指摘する。「牛若」とは「ウニコまみれの最卑賤の蔑称であった」というのである。なぜか。その根拠として、『今昔物語』第五十四の、馬の草を刈り、糞を捨てたりする草刈り童が極楽往生する話を挙げている。下賤の童子が神聖世界に転位する話だが、これと牛若がどう関係するのだろうか。

幸若舞曲「烏帽子折」に、牛若が元服して源九郎義経となる前後の活躍が描かれている。金売り吉次の下僕として付き従う牛若は、「草刈」という笛を腰に差していた。これを馬鹿にする人々に、教養のある長者が「草刈

笛の由来」を語って聞かせる。それは、恋を成就するために「草刈り山路」という「牛飼童」に身をやつし、「笛」を吹いて過ごす者が、宇佐八幡の祭礼の場で、実は用明天皇であったと、正体を顕わす話である。この「草刈笛」の故事ののち、「牛若」が盗賊退治をし、「義経」に元服するストーリーとなっている。

もはや明白なように、日本人は、最も下賤なものが、最も神聖なものへ転換するイメージを根強く持っているのである。この心意伝承に具体的な映像を与えると、たとえば「牛飼い・馬飼い」||「草刈り・糞尿処理担当」||「笛を吹く童子」||「神聖転換の可能性」という図式が、民間伝承に保存されているのがよくわかる(上原『曾我の雨』第二部「牛若の衣裳」参照)。神仏も、稚児・童子・若、および下賤とされる者も、この世的な規格からは超越した存在であり、同じ領域に位置する霊格であった。

ライフ・インデックス 生命指標としての稚児

このように、稚児・童子・若といった資格を持つ者は、特殊な人格、霊格を付与された生命存在として、一般人からは差別された待遇を受けると、上原は考えた。

団の象徴としての聖物である。特定の動植物の場合もあれば、無生物の場合もある。人々に礼拝されるトーテムは、その集団本来の活力としてのマナ(外来魂・威霊)を備え、その威力を人々にもたらす点で、その社会の神でもある(『宗教生活の原初形態』第二編 岩波文庫)。折口は、「いわゆる生命の指標(Life Index)と謂はれて居るものは、我が国の原始信仰に於いては、とうていである」、同時に、外来魂の常在所といふ事になるのである(『全集二〇』二〇二頁)とまとめる。つまり、生命指標を、個人別のいのちの容器とはせず、宇宙のどこから現れるマナ(外来魂)の容器であり、その容器に関わる人々全員に活力をもたらすと考えた。また、トーテムのような、特別に他と区別した「聖物」のみにマナが宿るとはせず、あらゆる動植物にマナがあるとすると。そうして、人々は自分にもたらされたマナの持ち主である動植物と、かわりを持って生活しているという(同二〇一頁)。つまり生命指標とは、プログラムのアイコンのようなものだ。関与しなければ何事もないただのモノである。礼拝したり、なでたり食べたりといった関与することで、その背後にある全体性が、起動する。よく日本人の信仰心はアニミズムが元にあると言われるが、折口の説は、日本人の生命観・生活観の、具体的な力学に

こうした生命観、人格観は、心意伝承によって我々自身の心身にも生きていくはず。言うならば、子どもの生命活動の原像を、我々は持っているはずなのである。変身ヒーローはなぜか、変身前は、さえない、無力な凡人であるパターンが少なくないことも、思い合わされたい。

祭りのような、共同体にとつての一大事においてこそ特殊な霊能を発揮する存在と、稚児は見なされてきた。それを上原は、「生命指標」としての稚児(『曾我の雨』二四四頁)という観点で、問題化するのである。

ライフ・インデックス(Life-index)とは、もともとは生命魂の容れ物のことを指している。C・S・バーン著『民俗学概論』(岡正雄訳 一九二七年 岡書院)巻末の印欧民譚型表六「パンチキン或は生命指標型」によると、恋人を魔物に奪われた若者が、その魔物の生命魂が入っている物(生命指標)を探し出して破壊し、不死身の魔物を倒すという話型をさす。フレイザーは、魔術師パンチキンに代表されるこの類型の民話を「外魂」の呪術として述べる。自分の魂を身体の外に安全なところに移して、自分自身が不死となるといった信仰である(『金枝編』第六章・六七章 岩波文庫)。

折口信夫の場合はこうした説に、デュルケムの説くトーテムズをも集合させる。トーテムとは、ある社会集まで踏み込んだ試みだったわけである。

上原の言う「生命指標」としての稚児」は、折口説を踏まえ、さらに上原なりの展開を見せる。祭礼の場で至高の存在として扱われる稚児は、数ある児童をテストして選ぶのではない。何かについて有能であるかいかは、問題ではなかった。くじ引きその他の、「神意」を測る方法で選ばれるに過ぎない。つまり「稚児に神霊を覗いている」(『曾我の雨』二四四頁)ことになるが、その証拠のように、選ばれた児童は、白粉を塗られて眉をなくし、紅をさされ、男女の区別をなくしてしまう。およそ個性などとは無縁で、それでいてぞっとするような色気を漂わせる。個性尊重を叫ぶ以上に、もっと考えなければならぬ大切な何かがあるのではないか、と思いが知らされる瞬間である。

しかし、さらに注意すべき点がある。「目的とするところは、稚児という概念を作り上げている心意心象である」(『曾我の雨』二三七頁)と上原は述べ、こう続ける。

稚児のそれを問うことは、稚児について伝承されたイメージのより確かな確認への接近である。

稚児と言われて何を想像するかよりも、その深層心

理におけるパターンの方を知ろうとしているとも言える。

難解だが、目の前の実物に惑わされず、しかし、その実物を作り上げた心意とはどのようなものかを考えよ、ということなのであろう。お祭りは、稚児が馬に乗って現れたり、山車やまぐるまの上で太刀を振り、注連縄しゆれんじゆを切ったり、采配を振ったりすることで動き出す。要するに、祭りという特殊な時間空間を起動させる神霊の具体像を、稚児と呼んでいるのである。その状況における稚児が、生命ライフ・インテグリティ指標である。

近代文明社会・経済大国である日本から、いまだにさまざまな祭りが消えてなくならないのは、現代日本人がこうした心意伝承から解放されていないことを示している。祭りを通じて、人々は社会のものと姿や、神話的な世界を再現しようとしているだけではなく、若々しい生命体を介した神霊示現によって、現在の活力を更新してもいるのである。こうした一連のプログラムを起動するのにふさわしい徴標アイコンが、晴れの舞台における稚児であると、日本人は感じ取ってしまったのだ。このことを、上原は次のような観点からもめぐり出す。

神との契約において人が生きようとする時、その契

無縁の人々までが、我が心の稚ライフ・インテグリティ児を喪失した虚無に、襲われてしまう。

上原が、心意伝承論を教育基層学と位置づけ、その究極として稚児の研究を考えたのは、生命指標としての児童観の確立が絶対条件だとしたからであった。調教の対象としてではなく、生命の神秘を具体的に把握しようとする視点がなければ、教育はむしろ人間を壊すだけの、危険なものになりかねないのである。

関与する側の心意伝承だけではない。上原は、児童自身に現れる心意伝承の追究に心血を注いでいた。子どもが成長し、言葉を獲得していくとき、「子どもたちはその生を精一杯の音声に託す」〔小学校国語の授業はこうする〕児童の言語生態研究会編 一九九一年 学芸図書 一四頁〕と言う。「それは成人の言葉からしてみると、いかに舌足らずであつても、その舌足らずぶりまで含めて、聞く側の心を揺るがしてくる。おそらくは、言語を介させるといふ意識を持たざる動物的生態としての音声機能を發揮しているからであらう。言うならば、感覚・感情の音声化である」(同一四頁)。正しい文法を教える以前に、人間にとって言葉とはなんだったのか、を教えてくれるのが、子どもの言語活動であり、言語生態であるという見方である。「現場教師の基本条件は、子

約を具象するものとして稚児の存在があるのであつて、神と人との契約に変動のある時は、必ず稚児の生命に変化が起こるのは当然であつたのかもしれない。それを逆に効果あらしめようとするのが、稚児犠牲、もしくは稚児殺戮ではなかったか」

〔曾我の雨〕二四四頁〕

つまり、共同体の精神構造の方に何か異常が生じたら、徴標アイコンも変色変形するというのである。こんにちの児童誘拐や幼児殺害事件が我々に与える恐怖も、こうした心意伝承がメディアによって拡張されたものなのだ。未来ある幼い生命が奪われたことのむごさ、悔しさ、切なさ、あまりに小さな棺桶。血を吐くように泣く若い両親を見てしまったら、誰もが内臓をえぐられるような思いに、さいなまれるしかない。だがそれだけではなかった。他所よその不幸に感情移入するというだけではなく、自分たちの生命指標ライフ・インテグリティが出血していることでもあった。こう感じ取ってしまう心意伝承によって、幼児殺害事件から、我が社会の腐敗を思い知らされ、あるいは社会と息の根が止められた衝撃を受けてしまうのが、日本人なのである。メディアのおかげで、犠牲となった幼子とは

どもの成長観察記録の第一人者になること」(同一頁)との信念に基づいて、小学校をはじめとする現場教師を集め、「児童の言語生態研究会」を組織した。文部大臣賞を受賞するなどの業績をあげつつ、同会は、上原亡き今も初志貫徹した活動を行っている。

トランスフォーメーション

上原は心意伝承を、児童の言語生態研究と同様に、現在生きている我々自身の生から取り出したいと考えるようになった。しかも、心理学等、関連諸科学のような、分析ナリシという方法ではなく、生なまものをナマのまま掬すくい取りするような方法で。やがてその手がかりが、思わぬことから与えられた。

一九八九年一月七日、昭和天皇が死去して、元号が昭和から平成に変わった。その時の世の中の動揺ぶり、人々の狂騒きやうそうぶりは今も記憶に新しい。いわば世界転換が起きたと言っている。新聞・テレビなどのメディアによって昭和史の大復習をさせられ、また同時に新しい時代が始まったとする慶祝ムードの波とで、世間の空気が異様な渦を巻いていた。

世界転換、時空変革。巻き込まれた人々の狂態は、む

しろ、こうした特殊時空にあつてこそ顕れる、日本人の生地の原態なのではないか。お祭りは、日常世界から神霊の発動する世界への転換。「トランスフォーメーション」としての、神霊世界の宇宙実現が祭りの本義であつた」(『曾我の雨』二百十七頁)とも、上原は述べている。歌舞伎の廻り舞台やどんでん返しは、単なる場面移動と言うより、芝居と観客との関係の破壊と再構築。さまざまな神話伝説も、何か合理的な秩序を超えた次元への転換場面が、人々の意識を惹きつける。世界転換・時空変革の事例を集めよう。そう上原は考えたに違いない。珍しく、「トランスフォーメーション」などという、カタカナ語を多用し始めたのも、その頃からであつた。恐らく、演劇用語の transformation scene (早変わり)の場面)から想を得たのだろう。分解すると、trans(超越) - formation (形象)となる。これを、上原は、現実座標上の事物を超えた、夢想・幻覚・妄想といった、イメージの世界を見てしまう心意体感を表す語として用いた。

その上原自身も、大喪の礼で昭和を見送りつつ、なにやら、感慨ひとしおの様子であつた。というのも、上原にとつての、最大の世界転換は、広島での被爆体験だつたはずだからである。生死の境に浮遊しながら、魂が辿

つた記憶の物語、『忘れ水物語』を、ちよと主婦の友社から出版したときのことでもあつた。その「追い書き」に、こう書かれてある。

八月六日、午前八時十五分、私は、広島駅頭にあつた。しかし、その時、その場所を、私の知覚は見失つた。意識を失つたわけではない。一瞬のうちに、人を包んでいる環境が様変わりするとどうなるか、(中略)建物は建つていて普通であり、戸外であれば、人は歩いていて普通なのに、その普通がなかった。また、爆撃なら、爆撃による破壊の過程を見て、人はそう認識し、人の死傷も、傷つき倒れる過程を見て、悲惨の情が喚起されるのに、その過程がなかった。(中略)人は、ただ、うめき、泣いた。いや、ただうめき泣いている物が、どうにか、人であつた。

自身も野ざらしになりながら、理不尽な被害にあつたと叫び訴えることをせず、上原は、抗いようのない世界転換に遭遇したときに見せる人間精神の、その世界への適応の仕方をじつと見つめていた。理性的な、ではなく、いわば靈性的な生きざま・極限状況における、生命燃焼を。こう結ぶ。

自身も野ざらしになりながら、理不尽な被害にあつたと叫び訴えることをせず、上原は、抗いようのない世界転換に遭遇したときに見せる人間精神の、その世界への適応の仕方をじつと見つめていた。理性的な、ではなく、いわば靈性的な生きざま・極限状況における、生命燃焼を。こう結ぶ。

死に近い生命体の末期現象だと言われようとも、私にとつて、あれは、決して終焉どころか始まりであつた気がする。(中略)原子爆弾は、人間を原始に返してしまふ爆弾であつた。それは人間にとつて瞋恚と悔恨との呪符にはちがいないが、それ以上に、逃れられぬ呪詛の中にしか生きられないことを思わせられた。

人間にもつと理性があれば、この様な悲惨な目に遭わずに済んだ。しかし、人間だからこそ、理性で測れぬ事態を起こし、あるいは起こされる。偶然と運命の複雑な連鎖の中では、人間は生きられない。トランスフォーメーションから、全ての人間は逃れられない。そして、その世界転換の経験は、好むと好まざるとに関わらず、何かが始まるための原風景となるのである。つまり被爆すら、上原には原風景に、違ひなかつた。

日本人の原風景を求めて、上原は旺盛に全国を歩いた。特に水害も起きやすいような、湿润地帯、水辺の景に、さまざまな祭礼や、遊女傀儡子の様な特殊風俗、神話伝説が集中することに着目した。往時そのままの風景は望むべくもないが、それでも日本は水の豊かな国だ。行ってみれば、地霊ならぬ水霊が、身心に語りか

けてくれる。トランスフォーメーションが、心意伝承の大事な指標となることは、確信した。次々に形を成した論考群は、『曾我の雨・牛若の衣裳―心意伝承の残像―』(二〇〇六年 暮しの手帖社編集)となつた。呆れ返るほど意気盛んなつた。それが、原稿だけ残して、逝つてしまった。まるで、原爆の時と肺癌の時に死神と交わした契約期限が切れてしまったかのよう……。

お前は、せめて捨てて石になれ、と言われたことがある。上原が逝つて十年経つが、まだかけらにもなっていない。いいかげんにしろという罵声が聞こえてくる。次回から、捨て石のたわごとを始める。